

さよならが

こだまする

ウーヴリアル文庫
冬雪 みさを

さよならがこだまする

—私が人生につまづいた時、泣きに来てもいいですか？—

彼女がそう言った時、どうして僕は彼女の話に耳を傾けてあげられなかったんだろう。どうして現実から目をそらしてしまったのだろう。僕の中のメトロノームが徐々にテンポを速めた時、彼女はそのテンポについていけなくて、僕とは相反対にゆっくりになって、そして、いつの間にかその音は消えていたんだ。なのに、僕はそれにも気が付かなかった。僕があまりに速かったから。僕は僕自身の音で彼女の音が聞こえなかったんだ。

<はじまり>

子宮の中でのやすらぎが忘れられなくて、人は人を求めるのでしょうか。子宮は宇宙だ。でもその宇宙でビッグリップが起きたらどうなる？僕らはどこへ行く？宇宙の外に弾き出された魂は当てもない旅人になるのでしょうか。

日曜の朝っぱらからそんな哲学的なTV番組を見てしまった。さすがNHKだ。当てもない旅人というキーワードから、中学の合唱コンクールで伴奏した『流浪の民』を思い出していた。僕は今まさに流浪の民と化している。あちこちのライブクラブやピアノラウンジに行っては、客のリクエストに合わせてピアノを弾く。時にはダンサブルに時にはジャズ調に時にはロックに。日当一万円。

<エネルギー>

現在、宇宙は膨張しておりどんどん加速していつにいつという。その膨張の原動力は「暗黒エネルギー」という物質らしい。それはどんどん引き離す力を持ち、最後には銀河や星や原子や、宇宙のあらゆる全てがバラバラになって宇宙はなくなるのだ。

僕もいつかバラバラになるのだろうか。この暗黒エネルギーが体の中を支配して、希望や、夢や、自分自身を外へ外へと引き離して、最後には宇宙と同じように跡形もなくなる。つまりビッグリップが起きてしまうのかと。放課後合唱コンクールのピアノ練習をしていた時も、そんな事を考えていた。壁に貼り付けられたヨハン・ゼバスティアン・バッハと目が合って、ふと我に返った。

<ニュートリノ>

つかみどころがないというのは嫌なもんだ。僕もつかみどころがないと言われるけど、彼女は僕の上をいつにいつと現れて、でも一学年下のクラスだったし特段気にもしていなかった。

とりあえず母子家庭で親が離婚したからうちの中学に来たんだという前情報だけはいち早く流れたもんだから、それだけで彼女のことを知った気になっていた。

もしこれが小説や映画だったら、彼女は実は絶世の美女で頭がよくてスポーツ万能でといったところなんだろうが、残念ながら(残念ながら、というのもまた失礼なんだが)そういうわけでもなかった。

まあ、本当に至って普通の顔立ち、背格好、成績。性格も派手じゃなければ地味でもない。ただ、みんなと早く打ち解けるためなんだろう。同じクラスの継谷愛実に誘われて、秋の合唱コンクールに参加してきた。

正直僕は・・・むかついていた。

僕らの学校は毎年合唱コンクールで全国大会において1位2位を争うほどの実力があって、その実力の影にはもちろん春から準備していたからで、そんな中軽い気持ちで参加されたらたまったもんじゃない。他の奴らもきっと同じ事を思っていたと思う。

だが、彼女の歌声を聴いて、みな一変した。普段の声はか細くて弱々しいのに歌声はまるで透き通った水のようなようだった。

せせらぎのように心地いい。

テレビではまだ宇宙エネルギーについて学者が熱弁をふるっていた。暗黒物質の一つと考えられていたニュートリノは、質量があまりに小さく大きな寄与は否定された。そもそもニュートリノというのは、素粒子のうちの中性レプトンのことで、電荷を持たず弱い相互作用と重力相互作用でしか反応しない。このため、他の素粒子との反応もわずかで、透過性が非常に高い物質だという。

<重力>

それでも存在はあるわけで、高エネルギー加速器研究機構からスーパーカミオカンデに向かってニュートリノを発射する実験を行い、存在確率が変動している状態を確認し、2004年、質量があることを確実なものとした。

僕はテレビをそのままに、シャワーを浴びに浴室へ向かった。

ヘッドから勢いよく飛び出る水玉に打たれながら、彼女のことを思い出していた。

彼女にとって僕は先輩で、だから「加納先輩」と呼ばれていたけど、部活にも入ってなかったし後輩と関わる事もそれまで全くなかったもんだから、加納先輩だなんて呼ばれることが気恥ずかしかった。

けれど、彼女はおかまいなしに放課後僕がピアノを弾いていると必ずといっていいほど隣に来て僕の名を呼び続けた。最初、なぜ彼女が僕に近づいてくるのかわからなかった。

話すことも「ピアノ上手なんですね。」とか「私は何も取り柄がなくて。」とか「コンクール優勝したいですね。」とか、いわゆる普通の世間話的なことばかりで、特段楽しいというわけでもなかった。

しかし、僕はいつの間にか彼女が今日も来るんじゃないかといった期待を持って音楽室に向かっている自分がいることに気がついていた。

僕は湯船に浸かって、ぼんやりと天井を見上げた。天井についたシャワーの水滴がポツリと額に当たった。それを避けるように、頭全部を湯船の中に沈めた。ドアの隙間からテレビの音が漏れてきた。宇宙の膨張速度について議論していた。ダークマタがどうか言っている。僕はもう聴くのも疲れ、しばらくずっと湯船の中にいた。

<光よりも速く>

コンクールは優勝した。帰り道、音楽の先生が買ってくれたマックポテトが妙に美味しくて、僕らはみんなはしゃいでいた。しかし、彼女だけは違っていた。みんなから一人離れてさっさと歩いている。「どうしたの？」気になって追いかけた。「いえ。でも終わったなって感じで。」「嬉しくないの？」「嬉しいは嬉しいですけど……。加納先輩の夢ってなんですか？」「え、夢？」少しだけ僕の中のメトロノームが動き出した。

「ピアニストとか？」

「それは、まあ。」

彼女は肩をふるわせていた。それは明らかに……。泣いているんだ。彼女の後ろ姿は小さくて、消えそうだった。「あの……」僕は狼狽して、でもどうしていいか分からず立ちすくんだ。「加納先輩。」後ろを向いたまま、彼女の声が聞こえた。セーラーカラーが風で宙を舞った。

「私が人生につまづいた時、泣きに来てもいいですか？」今の僕だったらきっと、彼女のその時の心理はわかったはずだった。でも当時の僕は15歳で、年齢のせいにするわけじゃないけど絶対的経験値が足りなかった。僕の中のメトロノームが徐々にテンポを速めた。

「さよなら」

そう言うと、彼女はそのままた闇へと消えた。針が振り切れるほどの速さを、僕はどうにもすることができずただ彼女の後ろ姿を見送った。

風呂から上がると、宇宙の議論番組は終わって速報ニュースが流れていた。国際ピアノコンクール入賞者が3年ぶりに決まったというニュースだった。タオルで頭を拭きながら、そのタオルの隙間から懐かしい顔が見えた。

そうだ、彼女の名前は望月藍郁だった。

マイクに向けられた笑顔の彼女は、輝いていた。

振り切った針が、また次第にゆっくりと動き出していた。僕は、いつの間にか完全に彼女のテンポから遅れてしまっていた。

最後に言った彼女の言葉が何度も何度も繰り返しこだまする。

「さよなら」

—宇宙はどうなるのでしょうか？—

風呂に入る前に学者が問いかけていた問題。

それはね、暗黒エネルギーに支配されてビッグリップが起きても、僕らはきっと繰り返す。
当てがあるから繰り返すんだよと。そこには悲しみとか嬉しさとか希望とかがあるわけじゃない
。

ただただ、切ないんだ。

了